

〈引用標識不在型複合名詞〉の音韻論的考察

——文末音調に着目して——

久 賀 朝

1 はじめに

日本語における引用表現のうち、一般に想起されるのは、次のような表現であろう。

(1) 彼は、「ただのミスじゃない」と言った。

上のような「『引用部』＋ト＋述部」という構造を持つ表現は「引用構文」と呼ばれ、日本語学における引用研究の主な対象とされてきた。引用構文は、次のような形で名詞を修飾することができる。

(2) 「ただのミスじゃない」という発言

(2)では、「という」が、引用部と主名詞をつなげる連結語としてはたらいている。これに対して、近年では、次のような表現も見られる。

(3) 「ただのミスじゃない」発言

(3)では、引用部「ただのミスじゃない」が、「という」という連結語を介さず、後続の名詞である「発言」に直接後続している。この点で、(3)は逸脱的表現であると言える。しかしながらこの用法は、先行研究でも報告されている通り、まとまった数の用例が見られる。注目すべきは、(3)において、「ミスじゃない発言」の部分が一つのアクセント単位となり（[ミˈスジャナイハˈツゲン]）、「『ただのミスじゃない』発言」全体で特殊な複合名詞を形成するという点である。本稿では、(3)のような表現を〈引用標識不在型複合名詞〉と命名し、音韻的側面から考察を加える。具体的には、引用部と名詞が複合する場合、「複合語アクセントの形成」と「文末音調の保存」がどのような関係にあるかという点について、筆者の主張を述べる⁽¹⁾。

(1) 本稿では、郡史郎(2020)にならい、「アクセント」を「ひとつひとつの単語がもともと持っている高さの動き」(郡 2020: 5, ゴシック体ママ)とし、「イントネーション」を「単語とは無関係の高さの動き」(同: 6, ゴシック体ママ)とする。本稿での「アクセント」「イントネーション」は、原則として共通語のものを指す。発音の表記については、[]内に表音カナで示すこととする。記号については、「ˈ」を上昇、「ˌ」を下降、「=」を平板、「|」をアクセント句境界、「/」をポーズ、「ノ」を疑問型上昇調とする。また、便宜的に、イントネーション・プロミネンスをまとめて「音調」と呼ぶ。

2 先行研究

2.1 新屋・東條 (2013)

本稿で扱う用例を対象とした研究のうち、最も早いものとして、新屋映子・東條和子 (2013) がある。そこでは、「やっと間に合った状態」([ヤツ「トマニアッタジョ」ータイ]) のような、後部要素が「状態」の場合に限定した考察が行われている。この研究は、引用部にそのまま名詞が後続するという新しい用法に注目した点では大きな意義がある。しかし、「状態」という語の歴史の変遷を踏まえたケース・スタディが中心であり、それ以外の語を含めた用法全体の特徴を明らかにするには至っていなかった。

2.2 泉 (2019・2021)

泉大輔氏は、本稿での〈引用標識不在型複合名詞〉に相当するものについて、「包摂現象」と位置付ける立場から、複数の論文を発表している⁽²⁾。そのうち、泉 (2019) では、モダリティを含む文が名詞に直接先行する形式を「語が文を包摂する形式」と呼び、コーパスを用いた大規模な調査によって、用法全体の特徴を分析した。そこでは、「語が文を包摂する形式」について、後続の名詞には抽象的な概念を表す漢語・外来語の名詞が多いという語彙の特徴が指摘されている。また、引用部末のモダリティと後続の名詞の意味的な親和性などについても言及されている。また、泉 (2021) は、後続名詞が「発言」であるものに対象を絞った考察である。そこでは、包摂現象には「語 (の包摂)」「句 (の包摂)」「文相当の要素 (の包摂)」といったタイプがあると指摘されている。また、それらの用法が成立するのは、引用という原理に支えられることで、語・句・文相当の要素が一つの塊となって合成語を形成するからだという。

3 〈引用標識不在型複合名詞〉の文法的位置付け

本稿で扱う表現について、先行研究では、破格の合成語・複合名詞として位置付けられている。筆者もこの見方には同意する。加えて、泉 (2021) では、それらを「引用」の原理に支えられた「包摂」現象と位置付けている。しかしながら、この見方には問題があるように思われる。「句の包摂」という用語を初めて明確に用いたのは影山太郎 (1993) であるが、そこには次のような記述がある。

(引用者注: 「句の包摂」の例を挙げた上で) これらは(6a)のような語彙化された表現とも、

(2) 「包摂」について、『日本語学大辞典』の「形態素」の項(執筆: 山下喜代)には、次のような記述がある。
さらに、接尾辞は語基や語に結合するものであるが、一部の接尾辞には、語の内部に句を取り込んだ「句の包摂」という現象が見られる。「[親に会いた] さ」「[海外への渡航者] 向け」「[雇用の受け皿] 的な建設業」「[モーターでかき回す] 式のもの」などが例である。
(p289左段、下線部ママ)

(6b)のような「いわゆる」の意味の引用を含む表現とも異なることに注意したい。

(6) a. [火の見] やぐら, [田の神] 祭り, [赤い羽根] 募金, [父の日] プレゼント, [いのちの電話] 相談員, [ガマの油] 売り

b. 「忘れなばこそ思い出さず候」式に言わなければならない (毛利可信『橋渡し英文法』) (影山 1993: 328)

上からもわかる通り、影山は、合成語の内部に引用部を含む表現について、句の包摂とは異なるとしている。同時に影山は、それが語形成論上でどのように位置付けられるかという点については言及していない。泉 (2021) の主張のうち、引用の原理に支えられて合成語を形成するという見方は十分に説得力を持つ。しかし、それを「包摂」としてしまうのは、用語を提案した影山自身が否定しているのであるから、不適切であろう。また泉 (2021) は、「包摂」されることばの単位として、「語」「句」「文相当の要素」の三種類があるとしている。しかしながら、筆者がインターネット上で見つけた次のような用例は、位置付けが難しいように思われる。

(4) 水泳の北島の「気持ちいい チョー気持ちいい」発言をボロクソ言ってたな そんなおかしいか?

(5 ちゃんねる, 2021. 5. 26閲覧, <https://5ch-ranking.com/cache/view/am/1233989653>)

(5) 平和演説はその末尾の言葉から「平和戦略」とも称され、市庁舎前演説は、その中に二度登場した言葉から、Ich bin ein Berliner 演説とも言われる。

(青木國彦 (2018) 「ケネディのベルリン演説 (1963年 6 月) 再考——ブラント東方政策との比較——」『研究年報 経済学』76(1), pp.19-58 東北大学経済学会の p.20.)

(4) の下線部は、「二つ以上の文」に名詞が直接後続している。また、(5) の引用部は「ドイツ語の文」である。上のようなものは決して例外ではなく、むしろ、どのようなことば (意味を持たない音連続を含む) もひとまとまりで名詞化するという引用部の特性をよく示すものである。泉 (2021) の見方は、「包摂」という考え方にこだわるあまり、引用表現の柔軟性を矮小化してしまっているようにも思われる。では、引用されたことばに名詞が直接後続する表現が「包摂」とは言えないとしたら、それを「合成語」あるいは「複合名詞」たらしめるものは何か。それは、「アクセントの改変」である。

本稿では、次のような見方を提案する。引用部は原則として、統語的単位にかかわらず、ひとまとまりで名詞化する⁽³⁾。引用部と後部要素は、引用標識を伴わずに、結合部分のアクセントの改変によっていわば破格の複合名詞を形成する場合がある。本稿では、こうして形成された複合名詞を〈引用標識不在型複合名詞〉と呼ぶ。

4 節以降では、〈引用標識不在型複合名詞〉について、引用部の文末音調と複合語アクセント

(3) この点については、拙稿 (久賀 2021) の 3 節を参照されたい。

形成の問題について考える。先行研究では、結合部分が複合語アクセントを形成するという点については指摘されているものの、音韻的側面、特に文末音調について分析されたものは管見の限りなかった。本稿では、引用表現が持つ発話の再現という側面に注目し、音韻・音声の観点から考察を加える。

4 〈引用標識不在型複合名詞〉と文末音調

ここで、冒頭の例をもう一度見てみたい。

(6) ただのミスじゃない発言 [= (1)の再掲]

(6)を、「連体修飾成分+主名詞」という構造と考えた場合、次のように発音されるのが一般的であろう。

(7) [‘タ’ダノ | ‘ミ’スジャ | ‘ナ’イ | ハ‘ツゲン] [= (6)の発音表記]

これに対して、〈引用標識不在型複合名詞〉と捉えた場合、

(8) 「ただのミスじゃない」発言 [= (3)の再掲]

はどのように発音されるだろうか。複合語アクセント規則に照らして一般的だと考えられるのは、(9)のように、引用部末と後続名詞とで一つのアクセント句を形成するというパターンである。

(9) [‘タ’ダノ | ミ‘スジャナイハ‘ツゲン] [= (8)の発音表記]

これは、意味上のまとまりとは無関係にアクセント句が形成される点で、窪田晴夫(1995)が指摘する「ミスマッチ」の一種と言える。このような現象は、「[小さな親切][運動]」(「チーサナ | シンセツウ`ンドー」)のように、一般的な名詞修飾表現でも見られるものであり、特に目新しい現象というわけではない⁽⁴⁾。また、右端の二要素がアクセント句を形成するという点は、同じく窪田(1995)が指摘する「(右)枝分かれ制約」にも従っている。しかしながら、アクセント句の形成には重要な役割がある。なぜなら、隣接部分がアクセント句を形成するかどうかによって、一般的な連体修飾表現と〈引用標識不在型複合名詞〉とを、音韻上で区別することが可能となるからである。

さらに、ここで考えておくべき問題がある。それは、「ただのミスじゃない」ということばが、文末音調によって三つの論理的意味を持つという点である。以下に典型的と思われる発音を示す。

(10a) [‘タ’ダノ | ‘ミ’スジャ | ‘ナ’イ] [①否定卓立]

→「ただのミスじゃない」発言(によって、社内に激震が走った)

(10b) [‘タ’ダノ | ‘ミ’スジャナイ] [②断定]

→「ただのミスじゃない」発言(によって、友人は笑顔を取り戻した)

(10c) [‘タ’ダノ | ‘ミ’スジャナノイ] [③否定疑問(疑問型上昇調)]

(4) 従来、これらの表現は、先に述べた「句の包摂」、あるいは「括弧付けのパラドックス」(bracketing paradox) などとして説明されてきた。

〔^ラタ^ダノ | ミ^スジャナ^イ〕〔③否定疑問（とびはね音調）〕⁽⁵⁾

→「ただのミスじゃない」発言（によって、確認作業が行われることになった）

上の意味の違いを踏まえると、「『ただのミスじゃない』発言」という〈引用標識不在型複合名詞〉では、どのような発音パターンが考えられるであろうか。

第一に考えられるのは、前掲の(9)のように、文末の音調による意味の違いを捨象するというパターンである。このとき結合部分では、引用部末のアクセント核は消失し、後続名詞の1モーラ目にアクセント核が置かれることになる。

(11) 〔^ラタ^ダノ | ミ^スジャナ^イハ^ツゲン〕〔=(9)の再掲〕

上の発音は、結合部分に一般的な複合語アクセントを適用させているものである。この点で、規則を重視したパターンであると言える。本稿ではこの発音パターンを、「複合語アクセント形成型」と呼ぶこととする。

第二に考えられるのは、引用部の文末音調を忠実に再現した上で、後部要素のアクセント核を1モーラ目に置くというパターンである。この場合、引用部と後部要素が一つの統語的単位であることを、まとまりの途中から示すことになる。結果として、付け足して複合名詞化したようにも感じられることになる。この発音パターンは、文末音調による解釈の違いに忠実であるという点で、意味を重視した発音パターンであると言える。本稿ではこの発音パターンを、「文末音調保存型」と呼ぶこととする。

次節では、〈引用標識不在型複合名詞〉の発音パターンについて、ケース・スタディとして具体的な調査をしたい。

5 「『ただのミスじゃない』発言」のケース・スタディ

5.1 発音パターン確認のための読み上げ調査（第一次調査）

4節では、「『ただのミスじゃない』発言」に「複合語アクセント形成型」「文末音調保存型」の二つの発音パターンが存在するという筆者の仮説を述べた。本節では、これを踏まえて、「『ただのミスじゃない』発言」を、実際に母語話者がどのように発音するのか、また、文末音調によって発音に違いが見られるかを明らかにする。

まず筆者は、第一次調査として、「『ただのミスじゃない』発言」には実際にどのような発音パターンがあるかを調べるための読み上げ式調査を実施した（2020年11月～2021年5月）⁽⁶⁾。そこ

(5) これ以外にも、次のような発音パターンも予想される。

・〔^ラタ^ダノ | ミ^スジャナ^イノ〕（二段に下がったのちに疑問型上昇調がかかるパターン）

(6) 対象は、首都圏（埼玉県・千葉県・東京都・神奈川県）を言語形成地とする母語話者とした。全員、学部または大学院で、言語文化（日本語学・日本文学・英語学）を扱う専攻の所属、あるいは出身者である。調査にあたっては、オンライン会議ツール「Zoom」およびプレゼンテーションソフト「PowerPoint」を用いた。方法としては、文脈を示したPowerPointの画面をZoom上で示し、それを読み上げてもらう形をとった。

ではまず、前節の文(10a)～(10c)およびそれに沿った文脈を示し、「下線部を、意味が明確に伝わるように、感情を込めて読み上げてください」と指示し、発音してもらった。続いて、「先ほどの発音による意味の違いを踏まえて、後に『発言』をつけてひとまとまりにする場合、どのように発音しますか」と質問し、発音してもらった⁽⁷⁾。その結果を表1に示す。

表1. 第一次調査の結果

① 否定 卓立	(書類の重大な誤りを発見した場面で) これはきっと、誰かが悪意を持ってやったことだ。 <u>ただのミスじゃない!</u> → [‘タ’ダノ ‘ミ’スジャ ‘ナ’イ] + 「発言」	
	1996M千葉	[‘タ’ダノ ‘ミ’スジャ ‘ナ’イハ’ツゲン] 複合語アクセント形成型
	1976F東京	[‘タ’ダノ ‘ミ’スジャナイハ’ツゲン] 複合語アクセント形成型
	1997F東京	[‘タ’ダノ ‘ミ’スジャ ‘ナ’イハ’ツゲン] 複合語アクセント形成型
	1995M埼玉	[‘タ’ダノ ‘ミ’スジャナイハ’ツゲン] 複合語アクセント形成型
	1996F東京	[‘タ’ダノ ‘ミ’スジャ ‘ナ’イ / ハ’ツゲン] 複合語アクセント形成型
② 断定	(失敗した友人を慰める場面で) 全然心配することないよ。 <u>ただのミスじゃない。</u> 誰にでもあることだよ。 → [‘タ’ダノ ‘ミ’スジャナイ] + 「発言」	
	1996M千葉	「意味の違いを反映できないので、発音できない」と回答
	1976F東京	[‘タ’ダノ ‘ミ’スジャナイ / ‘ハ’ツゲン] 文末音調保存型
	1997F東京	[‘タ’ダノ ‘ミ’スジャナイハ’ツゲン] 複合語アクセント形成型
	1995M埼玉	[‘タ’ダノ ‘ミ’スジャナイハ’ツゲン] 複合語アクセント形成型
	1996F東京	[‘タ’ダノ ‘ミ’スジャナイ / ‘ハ’ツゲン] 文末音調保存型
③ 否定 疑問	(データに誤りが見つかり、職場が大混乱している場面で) みんな大騒ぎしてるけど、 <u>ただのミスじゃない?</u> → [‘タ’ダノ ‘ミ’スジャナイイ] + 「発言」 / [‘タ’ダノ ‘ミ’スジャナ’イ] + 「発言」	
	1996M千葉* ¹	[‘タ’ダノ ‘ミ’スジャナイハ’ツゲン] 複合語アクセント形成型
	1976F東京* ²	[‘タ’ダノ ‘ミ’スジャナ’イ / ‘ハ’ツゲン] 文末音調保存型
	1997F東京* ³	[‘タ’ダノ ‘ミ’スジャナイハ’ツゲン] 複合語アクセント形成型
	1995M埼玉* ⁴	[‘タ’ダノ ‘ミ’スジャナイハ’ツゲン] 複合語アクセント形成型
	1996F東京* ⁵	[‘タ’ダノ ‘ミ’スジャナ’イ / ‘ハ’ツゲン] 文末音調保存型

* 1 : 引用部単体はとびはね音調で発音, 「場面によってはとびはね音調も使用する」と回答

* 2 : 引用部単体は疑問型上昇調で発音, 「とびはね音調自体が許容できない」と回答

* 3 : 引用部単体は疑問型上昇調で発音, 「場面によってはとびはね音調も使用する」と回答

* 4 : 引用部単体はとびはね音調で発音, 「場面によってはとびはね音調も使用する」と回答

* 5 : 引用部単体は疑問型上昇調で発音, 「場面によってはとびはね音調も使用する」と回答

(7) 今回の二つの調査では、文末音調の存在、および引用されたことばであることを表記上で示すための手段として、引用部末に記号(「。」「!」「?」)を付すこととした。これは、「ベトナムに平和を! 市民連合」「野菜を食べよう! キャンペーン」などの表記に倣ったものである。

上の結果を踏まえると、三つの点が指摘できる。

一つ目は、「複合語アクセント形成型」において、複合の開始位置・度合いに個人差が見られるという点である。たとえば、「①否定卓立」では、複合語アクセントが「ミスじゃない発言」で形成されるものと、「ない発言」で形成されるものの二通りが聞かれた。また、「ない発言」で複合語アクセントを形成しているものの、「ない」と「発言」の間にポーズを置く発音も聞かれた。これには、文末音調による意味の違いを何らかの形で反映させようという話者の意識とも関わっている可能性がある。

二つ目は、パターンとしては「複合語アクセント形成型」が優勢であるという点である。もちろん、複合のしやすさには差があり、もともと引用部末が高く発音される「③否定疑問」であれば、後続の名詞と複合語アクセントを形成しやすい可能性がある。これに対し、「②断定」では、意味を明示するには引用部末を低くすることが必須である。それにもかかわらず、2名は、文末音調を捨象し、複合語アクセントを形成している。これは、通常の複合語アクセント規則が持つ一般性の高さを示しているものと思われる。

三つ目は、「文末音調保存型」が存在するという可能性である。これには、アクセント・イントネーションに対する意識の高さなど、個人差も大きく関係している可能性がある。しかし、この発音パターンが複数名から聞かれたことは、注目すべき点である。

しかし、これらの発音からわかることは、人によっても発音にかなりの違いが見られるという点である。そのため、これらの発音がどの程度一般的に容認されるものであるのかを確かめる必要がある。

5.2 許容度判定のための音声聴取調査（第二次調査）

第一次調査では、「複合語アクセント形成型」「文末音調保存型」のどちらを選択するかについて、話者ごとにかなり違いがあることが明らかになった。これはすなわち、複合語アクセントという「規則性」と、文末音調という「意味」との間に、一種の緊張関係が生じているということを示している。したがって、この相反する発音パターンどうしを比較した場合、どちらが許容されやすいのかを、より詳しく調べる必要がある。

筆者は、第二次調査として、発音パターンごとの許容度を調べる音声聴取式調査を行なった（2021年7月～8月）。調査では、1995年～2002年生まれの33名から協力を得ることができた⁽⁸⁾。

（8）被験者の内訳は次の通りである。

- ・ 生年：1995年（1名）、1996年（6名）、1997年（2名）、1999年（3名）、2000年（8名）、2001年（10名）、2002年（3名）
- ・ 性別：女性（22名）、男性（9名）、無回答（2名）。
- ・ 言語形成地：東京都（9名）、千葉県（5名）、埼玉県（4名）、神奈川県・静岡県・広島県（各2名）、栃木県・富山県・岐阜県・愛知県・三重県・兵庫県・鳥取県・岡山県（各1名）、中国（1名）。

そこではまず、第一次調査と同一の文脈・用例を示した。その上で、第一次調査で得られた発音、および筆者が想定した発音を示し、それらが日本語の発音として許容できるかどうかを、「許容できる」「どちらとも言えない」「許容できない」の三つから選んでもらう方法をとった⁽⁹⁾。得られた結果について、文脈（引用部の文末音調の意味）ごとに、カイ二乗検定および（必要に応じて）残差分析を行った。それにより、発音パターンと許容度の間に相関関係があるか、あるいはそれぞれ独立したものであるかを調査した。

5.2.1 文脈(1)：否定卓立の場合

文脈(1)は、「じゃない」が否定卓立の意味を持つ場合である。

〔書類の重大な誤りを発見した場面で〕

A さん：これはきつと、誰かが悪意を持ってやったことだ。ただのミスじゃない！

→ A さんの ただのミスじゃない！ 発言

ここでは、次の三つの発音パターンを用意した。ピッチ図を合わせて示しておく。

発音①：[「タ」ダノ | ミ「ス」ジャナイハ「ツ」ゲン]（複合語アクセント形成型）

発音②：[「タ」ダノ | 「ミ」スジャ | ナ「イ」ハ「ツ」ゲン]（複合語アクセント形成型／ナイ複合型）

発音③：[「タ」ダノ | 「ミ」スジャ | 「ナ」イ / 「ハ」ツゲン]（文末音調保存型）

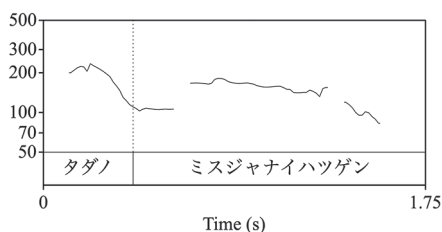


図 1. 文脈(1)発音①のピッチ図

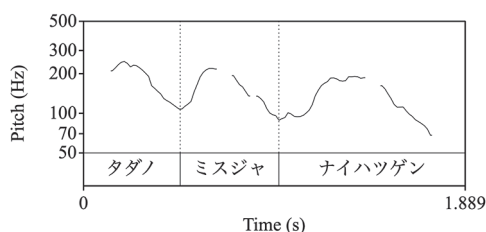


図 2. 文脈(1)発音②のピッチ図

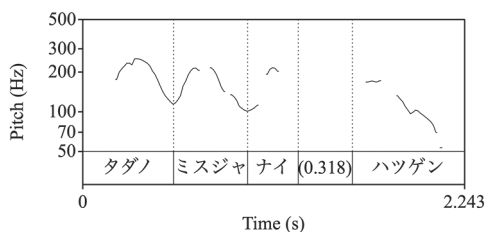


図 3. 文脈(1)発音③のピッチ図

(9) 調査には、アンケートツール「Google Form」および動画投稿サイト「YouTube」を利用した。筆者は事前に、文脈のスライドと音声（筆者が読み上げたもの）が付された動画を、被験者のみが閲覧できる形で YouTube にアップロードした。被験者は、アンケートフォームに埋め込まれたリンクから動画を閲覧した上で、三者択一式のアンケートに回答してもらった。

これらの発音に対する許容度は、次の通りであった。

表 2. 文脈(1)の発音パターンと許容度

発音ごとの回答者数				残差分析 (▲：有意に多い, △：有意に少ない)			
	発音①	発音②	発音③		発音①	発音②	発音③
許容できる	9	17	28	許容できる	-3.85▽	-0.43	4.28▲
どちらとも言えない	6	8	2	どちらとも言えない	0.39	1.54	-1.93
許容できない	18	8	3	許容できない	3.90▲	-0.78	-3.12▽
合計	33	33	33	$p < .01, \chi^2(4) = 25.64$			

実測値をカイ二乗検定した結果、有意水準 1 %, カイ二乗値 25.64 (自由度 4) で回答に有意差が見られ、発音パターンと許容度との間に相関関係があることが分かった。残差分析を行うと、それぞれ 1 % 水準で、「発音①を許容できない」「発音③を許容できる」が有意に多く、「発音①を許容できる」「発音③を許容できない」が有意に少ないことが分かった。これはすなわち、「文末音調保存型の発音のほうが許容されやすく、複合語アクセント実現型のほうが許容されにくい」ということを示している。また、同じ複合語アクセント形成型でも、発音① ([ミ`スジャナイハ`ツゲン]) よりも発音② ([ナ`イハ`ツゲン]) のほうが、許容度が高い傾向がある。これは、後続名詞と複合する場合であっても、複合の開始位置を変化させることによって、「ただのミスじゃない」の否定の意味を明確に表そうとする意識が反映されていると思われる⁽¹⁰⁾。

5. 2. 2 文脈(2)：断定の場合

文脈(2)は、「じゃない」が断定の意味を持つ場合である。

〔失敗した友人を慰める場面で〕

B さん：全然心配することないよ。ただのミスじゃない。誰にでもあることだよ。

→ B さんの ただのミスじゃない。発言

ここでは、次の二つの発音パターンを用意した。ピッチを表す図を合わせて示しておく。

発音①：[‘タ’ダノ | ミ`スジャナイハ`ツゲン] (複合語アクセント形成型)

発音②：[‘タ’ダノ | ‘ミ`スジャナイ / ‘ハ`ツゲン] (文末音調保存型)

(10) 複合の開始位置を話者が決定するという見方は、奇妙に思われるかもしれないが、本稿で扱った表現以外にも見られる現象である。定延 (1999) には、「ページめくり (テスト)」について述べた箇所がある。そこでは、文章を音読するにあたって、複合名詞の途中でページをめくる必要がある (= 複合名詞の全体が分からない) 場合に、どのようにアクセント句が形成されるかという点について指摘されている。このように、どこまでをひとまとまりで発音するかが話者に委ねられるような状況は、〈引用標識不在型複合名詞〉に限ったものではない。

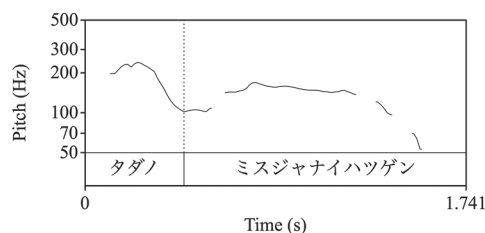


図 4. 文脈(2)発音①のピッチ図

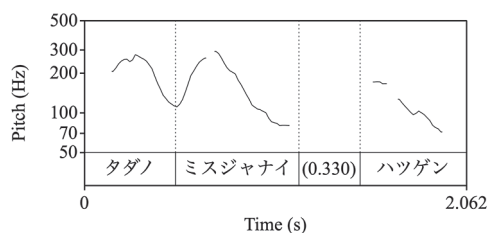


図 5. 文脈(2)発音②のピッチ図

これらの発音に対する許容度は、次の通りであった。

表 3. 文脈(2)の発音パターンと許容度

発音ごとの回答者数			残差分析 (▲：有意に多い, △：有意に少ない)		
	発音①	発音②		発音①	発音②
許容できる	16	26	許容できる	-2.56▽	2.56▲
どちらとも言えない	6	3	どちらとも言えない	1.08	-1.08
許容できない	11	4	許容できない	2.06▲	-2.06▽
合計	33	33	$p < .05, \chi^2(2) = 6.82$		

実測値をカイ二乗検定した結果（イエーツの補正あり）、有意水準 5%，カイ二乗値 6.82（自由度 2）で回答に有意差が見られ、発音パターンと許容度との間に相関関係があることが分かった。残差分析を行うと、それぞれ 5%水準で、「発音①を許容できない」「発音②を許容できる」が有意に多く、「発音①を許容できる」「発音②を許容できない」が有意に少ないことが分かった。これはすなわち、文脈(1)の調査結果と同様に、「文末音調保存型の発音のほうが許容されやすく、複合語アクセント実現型のほうが許容されにくい」ということを示している。

5.2.3 文脈(3)：否定疑問の場合

文脈(3)は、「じゃない」が否定疑問の意味を持つ場合である。

〔データに誤りが見つかり、職場が大混乱している場面で〕

C さん：みんな大騒ぎしてるけど、ただのミスじゃない？

→ C さんの ただのミスじゃない？ 発言

ここでは、次の三つの発音パターンを用意した。ピッチを表す図を合わせて示しておく。

発音①：[「タ」ダノ | ミ「スジャナイハ」ッゲン]（複合語アクセント形成型）

発音②：[「タ」ダノ | 「ミ」スジャナ「イ」 / 「ハ」ッゲン]（文末音調保存型／疑問型上昇調）

発音③：[「タ」ダノ | ミ「スジャナ」イ / 「ハ」ッゲン]（文末音調保存型／とびはね音調）

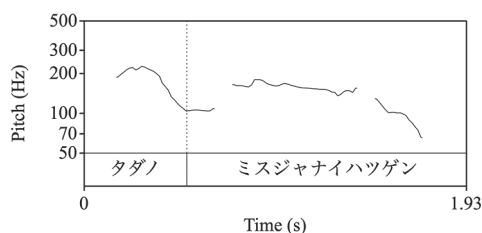


図 6. 文脈(3)発音①のピッチ図

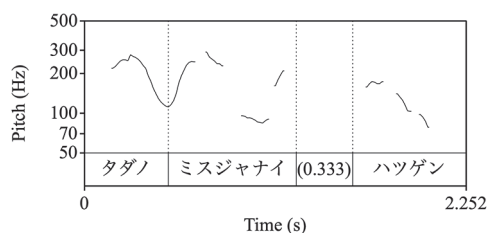


図 7. 文脈(3)発音②のピッチ図

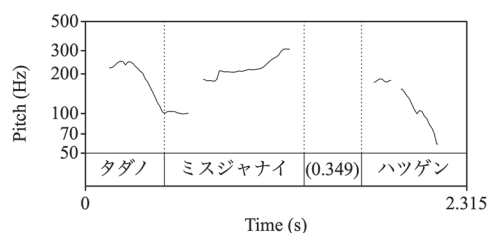


図 8. 文脈(3)発音③のピッチ図

これらの発音に対する許容度は、次の通りであった。

表 4. 文脈(3)の発音パターンと許容度

発音ごとの回答者数			
	発音①	発音②	発音③
許容できる	22	28	26
どちらとも言えない	3	2	4
許容できない	8	3	3
合計	33	33	33
$p \geq .2, \chi^2(4) = 4.75$			

実測値をカイ二乗検定した結果（イエーツの補正あり），回答に有意差は見られず，発音パターンと許容度の間には相関関係がないことが分かった⁽¹¹⁾。これは，発音①～③の全てで「許容できる」が三分の二以上を占めているためと思われる。言い換えれば，文脈(1)と文脈(2)と比較すると，「複合語アクセント実現型」の許容度が高いということである。この要因として，疑問型上昇調・とびはね音調のいずれも，（語に備わる調素としての「高低」以外も含めて）文末が高く発音されるという点があると思われる。つまり，意味に忠実に発音する場合に文末が低く発音されることが必須の文脈(1)・(2)と比較して，複合語アクセントを形成した場合に生じる違和感が小さいという可能性がある。

(11) 回答に有意差が得られなかったため，残差分析は行わなかった。

5.3 〈引用標識不在型複合名詞〉の発音における「文末音調保存型」の存在

二つの調査を踏まえると、少なくとも今回の調査で用いた文脈においては、筆者の注目する「文末音調保存型」が許容される余地があることは明らかである。そもそも「文末音調保存型」は、従来のアクセント規則からは逸脱したものであり、かなり特異な発音パターンである。これは、〈引用標識不在型複合名詞〉そのものが逸脱的な表現であることに由来するものと思われる。従って、この調査結果だけでは、日本語の複合名詞のアクセントとして「文末音調保存型」が存在するとはもちろん断言できない。しかしながら、第一次調査では、「文末音調保存型」で発音する話者が複数名存在した。また、第二次調査では、従来の「複合語アクセント形成型」が許容されにくく、むしろ「文末音調保存型」の方が許容されやすい場合があることも示された。管見の限りでは、このような「文末音調保存型」の発音が存在する可能性を、まとまった数のデータとともに示した研究はない。この点で、今回の調査は少なからぬ意味を持つものと思われる。

また「文末音調保存型」は、「後続名詞のアクセント核を1モーラ目に置く」という複合名詞の特徴と、「引用部を忠実に発音する」という文相当の特徴を併せ持っている。すなわち、音韻論的には完全に複合していない、いわば「不完全な複合名詞」である。これに対して、「複合語アクセント形成型」は、完全に既存のアクセント規則に従っており、「完全な複合名詞」と言える。これは、見方を変えれば、引用部と名詞の複合に段階性があるということでもあるのかもしれない⁽¹²⁾。これは、一般的な複合名詞ではまず考えられないことであり、発音に音調が関与する余地のある引用表現ならではの現象と言える。

さらに、文末音調の再現という側面は、引用されたことばがどの程度忠実に再現されているか（藤田（2000）風に言えば「アイコン記号的であるか」）という問題とも関わってくる。引用部がアイコン記号からシンボル記号に変化していくプロセスを考えるには、音声的再現という側面は無視できない。この点で、「文末音調保存型」の存在は、シンボル記号とアイコン記号の連続性をも同時に示していると言えよう。

6 後部要素のタイプと〈引用標識不在型複合名詞〉

5節では、〈引用標識不在型複合名詞〉のアクセント形成において、「ただのミスじゃない発言」を例にケース・スタディを行なった。そこでは、発音パターンとして「複合語アクセント形成型」と「文末音調保存型」の対立があること、および後者の許容度が高い可能性を示した。

ここまで取り上げた用例は、後続名詞が4モーラの二字漢語である表現であった。そこでのアクセント形成を見てみると、「後続名詞のアクセント核を1モーラ目に移動させる」「引用部末を平板化させる」という二つの音韻論的な改変（前者は必須、後者は任意）が生じている点が観察

(12) ここでの「複合の段階性」とは、秋永（2014）の指摘する「癒合語・結合語・接合語」の分類とは異なる。

できた。本節では、「後続名詞のアクセント核を1モーラ目に移動させる」というアクセント規則に該当しない、例外的と思われる現象について観察する。前節でも述べた通り、〈引用標識不在型複合名詞〉は、一定数は見られるものの、逸脱の表現である点は否めず、実際の発音を均質的・体系的に収集することは困難である。そのため本節では、筆者が個別に収集した用例を見ていくこととする⁽¹³⁾。

6.1 後部要素が接尾辞的な形態素である場合

〈引用標識不在型複合名詞〉では、後続名詞が2モーラ以下である用例は少ない。発音が確認できた実際の用例のうち、後続の名詞が2モーラ以下の場合のものには、次のようなものがある。

- (12) 今村さんの「寒くなりますよ」圧がすごかったですね。⁽¹⁴⁾

・[「サ」ムク | ナ「リマスヨ」アツ]

(2020.12.11放送「スーパー J チャンネル」テレビ朝日系列)

- (13) 私は彼女いない歴=年齢の29歳です

・[「カ」ノジョ | イ「ナイ」レキ]

(YouTube「彼女いない歴=年齢でも恋人を作る方法【メンタリスト DaiGo 切り抜き】」)

2021.7.30閲覧, <https://youtu.be/-0sbEJzEZk4?t=1>)

- (14) 「自分は何がやりたいんだ」病

・[ジ「ブンワ」 | ナ「ニガ」 | ヤ「リタインダビョー」]

(2021.3.5放送「あさイチ」NHK 総合)

後部要素は、一字の字音形態素かつ接尾辞的なものである場合が多いようである。一般的な複合名詞では、後部要素が2モーラ以下である場合、規則として一般化することは難しいとされる。そのため、後部要素がどのような語であるかによって、全体のアクセント核が決定すると説明される。〈引用標識不在型複合名詞〉においても、後部要素が2モーラ以下である場合は、それがどのような語であるかによって、全体のアクセント核が決定する。この点で、前節までで述べた「後部要素の1モーラ目にアクセント核が置かれる」という規則からは逸脱する。しかし、(12)～(14)のいずれも、それぞれ「圧」「歴」「病」を後部要素とする一般的な複合名詞と同様の位置にアクセント核が置かれている。この点で、〈引用標識不在型複合名詞〉のうち、後部要素が2モーラ以下のものを発音する場合、一般的な複合名詞に準じてアクセント核の位置が決定されるものと考えられる。

(13) 本節では、議論の煩雑化を避けるため、引用部の文末音調の問題は捨象するものとする。

(14) この発言の前の天気予報コーナーで、気象予報士（今村さん）が、翌日に厳しい冷え込みが予想されることを繰り返し警告していた。例文(12)は、それを受けて男性アナウンサーが発したものである。

6.2 後部要素が外来語名詞である場合

〈引用標識不在型複合名詞〉では、後続の名詞が外来語であるような用例が数多く存在する。この場合、結合部のアクセント核は、後続名詞のものが保持される。

(15) ＃元気いただきますプロジェクト

・[¹ゲ²ンキ・イ¹タダキマスプロ²ジェクト] または [¹ゲ²ンキ・イ¹タダキマスプロジェ²クト]⁽¹⁵⁾

(YouTube「広瀬すず、ごちそうを口いっぱい頬張る！『＃元気いただきますプロジェクト』CM」2021.7.30閲覧, <https://youtu.be/tZvR45ZcjUs>)

(16) 明太子ば食べてみんしゃい！キャンペーン

・[メ¹ンタ²イコバ|タ¹ベテミンシャイキャンベ²ーン]

(YouTube「『明太子ば食べてみんしゃい！キャンペーン』解説」2021.7.30閲覧 https://youtu.be/k_FeqI0Im2I?t=16)

(17) 「話しかけないで」オーラ

・[ハ¹ナシカケナイデオ²ーラ]

(2021.4.12放送「モーニングショー」テレビ朝日系列)

上の用例を見ると、後部要素が外来語である場合の〈引用標識不在型複合名詞〉のアクセントには、「前部要素（＝ここでは引用部末）のアクセント核を消失させ、後部要素のアクセント核を保持する」という規則が見出せそうである。これは、一般的な複合名詞のうち「不完全複合名詞」と呼ばれるもののアクセントと同様である。ここからも分かる通り、引用標識不在型複合名詞のうち、後部要素が外来語であるものは、「後部要素の1モーラ目にアクセント核が置かれる」という規則では一般化できないものの、一般的な複合名詞（不完全複合名詞）に準じた発音がなされていることが確認できる。

6.3 後部要素が複合名詞である場合

〈引用標識不在型複合名詞〉には、極めて数は少ないが、次のような用例もある。

(18) ベトナムに平和を！市民連合

ここで注目すべきは、後続の名詞が既に複合語アクセントを形成しているという点である。この語の構造を枝分かれ図で示すと、次のようになる。

(19) [ベトナムに平和を！] [[市民] [連合]] [= (18)の枝分かれ図]

上では、「市民連合」が既に右枝分かれ構造を作っている。従って、通常のアクセント形成規則

(15) 「プロジェクト」のアクセントに、窪蘭 (2004) のいう「前進型」([プ¹ロ²ジェクト]) と「-3型」([プ¹ロジェ²クト]) の二通りがあるため。

から考えれば、「ベトナムに平和を！」との複合語アクセント形成は阻止されることになる。では、実際の発音はどうであろうか。筆者は、5節の第一次調査と合わせて、5人の母語話者に発音を確認してみた。

(20a) 引用部末と後続名詞を分離して発音するパターン

- ・[べ¹トナムニ | へ¹ーワオ / シ¹ミンレ¹ンゴー] (1976F 東京)
- ・[べ¹トナムニへーワオ / シ¹ミンレ¹ンゴー] (1997F 東京・1995M 埼玉)

(20b) 引用部末と後続名詞でアクセント句を形成するパターン

- ・[べ¹トナムニへーワオシミンレ¹ンゴー] (1996M 千葉)
- ・[べ¹トナムニへーワオ / シミンレ¹ンゴー] (1996F 東京)

調査では、枝分かれ制約に従う発音(= (20a))が3名、枝分かれ制約に従わない発音(= (20b))が2名であり、明らかな違いは見られなかった。この点に関連して、郡(2016)の4.5節に興味深い指摘がある。そこでは、「日本語教育能力検定試験」のアクセントについて述べられている。郡によれば、言語系の研究者のうち、日本語教育の専門家でない者は[ニ¹ホンゴキョーイクノーリョク | ケ¹ンテーシ¹ケン] [ニ¹ホンゴ | キョ¹ーイクノーリョク | ケ¹ンテーシ¹ケン]と発音する場合が多いという。これに対し、日本語教育の専門家は、[ニ¹ホンゴキョウイクノーリョクケンテーシ¹ケン]のように、一つのアクセント単位で発音するのを好むという。郡はこれを、「長い複合名詞における専門家アクセントということができそうである」としている(郡 2016: 46)。この指摘を踏まえると、「ベトナムに平和を！市民連合」も、なじみ度によって、話者ごとにアクセント句形成パターンの違いが生じる可能性がある。すなわち、脳内に一つのレキシコンとして登録されていれば(20b)の発音となり、そうでなければ順番にアクセント句を形成する(20a)のパターンとして発音されるということである。この点に関しては、母語話者の言語使用と密接に関わっており、さらなる検討を要するものであるが、ここではこの程度の指摘にとどめておきたい。

いずれの発音パターンでも、「後続名詞のアクセント核を1モーラ目に移動させる」という規則には従っていないものの、一般的な複合名詞の発音パターンからは逸脱していないという点が分かる。

6.4 本節のまとめ

本節では、〈引用標識不在型複合名詞〉のアクセント規則について、「後部要素の1モーラ目にアクセント核を置く」という規則に該当しないものを扱った。本節で明らかになったのは、後部要素が、2モーラ以下の場合(6.1)、外来語の場合(6.2)、既に複合名詞である場合(6.3)のいずれも、それぞれの条件下における一般的な複合名詞のアクセント規則・パターンにならった発音がなされているという点である。〈引用標識不在型複合名詞〉は、逸脱的な表現ではあるも

の、(5節までで扱ったような)文末音調を保存する場合を除いては、通常のアクセント体系の中で発音される可能性が高いことが分かった。

7 おわりに

本稿では、「『ただのミスじゃない』発言」の類の表現について、〈引用標識不在型複合名詞〉と名付けて考察を加えた。

2節では、先行研究を概観した。そこでは、「状態」という語を個別に分析した論考や、包摂という見方で説明しようとする論考があることを述べた。3節では、〈引用標識不在型複合名詞〉が、逸脱的な複合名詞として位置付けられ、引用の原理によって成り立つ表現であるとした。そこでは、複合語アクセントの形成という音韻論的な視点が重要であると述べた。4節では、音韻論的な見方を推し進めると、引用部の文末音調によって意味の違いが生じる点を指摘した。5節では、複合語アクセント形成と文末音調の関わりについて、「『ただのミスじゃない』発言」を例にケース・スタディを行った。それにより、〈引用標識不在型複合名詞〉には、一般的なアクセント規則を優先させる「複合語アクセント形成型」と、文末音調による意味の違いを重視する「文末音調保存型」とがあるとした。さらに、「文末音調保存型」の方が許容度が高い可能性が示された。また、これらの二つの発音パターンの存在は、複合語アクセント形成論のみならず、記号論的な連続性を考えるための重要な問題であると述べた。6節では、「アクセント核が後部要素の1モーラ目に置かれる」という規則に従わない、例外的な現象を取り上げた。そこでは、後部要素が、2モーラ以下・外来語・右枝分かれ構造という三つの場合を取り上げた。いずれの場合も、一般的な複合名詞に準じた発音がなされており、既存のアクセント体系から逸脱することはないという点が明らかになった。

本稿では扱えなかったが、複合語形成を音韻論的に考察するには、連濁の有無も重要になってくる。また今後は、引用部の終助詞・文末音調の種類や後続名詞のアクセント型・語種などを踏まえ、対象をさらに拡大し、本稿での考察を精緻化していきたい。

本稿で取り上げた〈引用標識不在型複合名詞〉は、ある意味での破格の表現ではあるが、決して特殊なものではない。ここで見られるような意味と形式の相関は、逸脱的であるからこそ、日本語の表現における「ダイナミズム」や「ゆらぎ」として、類似の現象も含めて検討されるべきであろう。

参考文献

- 秋永一枝編 (2014) 『新明解日本語アクセント辞典 第2版 CD付き』三省堂
泉 大輔 (2019) 「文を包摂する名詞の形式的な特徴に関する考察」『言語資源活用ワークショップ2019発表論文集』 pp.2-14 国立国語研究所コーパス開発センター
——— (2021) 「語・句・文を前部要素とする『X 発言』の形式的・意味的特徴に関する考察——『爆弾発言』

- 『消費税の引き上げ発言』『ふざけんな発言』などを対象に——』『言語・地域文化研究』27, pp.57-76 東京外国語大学大学院総合国際学研究所
- 影山 太郎 (1993) 『文法と語形成』 ひつじ書房
- 久賀 朝 (2021) 「『広告引用』の特性について——品詞性の問題を中心に——」『早稲田日本語研究』30
- 窪田 晴夫 (1995) 『語形成と音韻構造』 くろしお出版
- (2006) 『アクセントの法則』 岩波書店
- 郡 史郎 (2016) 「長い複合名詞のアクセント——『携帯電話電源オフ車両』などの説明原理についての覚え書き——」『音声言語』4, pp.31-48 近畿音声言語研究会
- (2020) 『日本語のイントネーション——しくみと音読・朗読への応用——』 大修館書店
- 定延 利之 (1999) 「アクセントを合成するとは何をどうする行動か」 音声文法研究会編『文法と音声Ⅱ』くろしお出版
- 新屋映子・東條和子 (2013) 「直接引用形式を前項に持つ複合名詞『～状態』をめぐる」『桜美林論考 言語文化研究』4, pp.35-47 桜美林大学
- 日本語学会編 (2018) 『日本語学大辞典』 東京堂出版
- 藤田 保幸 (2000) 『国語引用構文の研究』 和泉書院

付記

第一次調査・第二次調査にご協力いただいた皆様に、深く感謝申し上げます。本稿は、筆者の修士論文の一部を再構成し、大幅に書き改めたものである。修士論文執筆の段階から、主査の森山卓郎先生はもとより、副査の上野和昭先生・山岡華菜子先生からも、数多くの貴重なご助言を賜った。記して感謝申し上げます。もちろん、本稿の誤りや不備は全て筆者に帰すものである。